

# 「80・90年代における美との対面」展を終えて

ボローニャ大学教授 シモーナ・セグレ・ライナツハ

## AFTER A FASHION EXHIBIT “80s 90s FACING BEAUTIES: ITALIAN FASHION AND JAPANESE FASHION AT A GLANCE”

Simona Segre REINACH, Professor, University of Bologna

The exhibition “80s-90s FACING BEAUTIES: Italian Fashion and Japanese Fashion at a Glance” (11 October - 8 December 2013) explores the aesthetic, cultural and communicative innovations of the two important fashion systems at their peak during the 80’s and 90’s of the 20th century. The one is the prêt-à-porter of Italian stylists such as Armani, Versace, Ferré, Moschino, Coveri and the other is the radical fashion of Japanese designers represented above all by Miyake, Kawakubo and Yamamoto.

During the 80’s and 90’s of the last century fashion became a mass phenomenon; it established itself as an important sector of production, as a cultural industry and as one of the major instruments of communication. Japanese and Italian fashion came to represent the two main exponents of modern fashion, alongside the more traditional predominance of French fashion. Despite the diversity of their histories and traditions, these two fashion trends share certain basic aspects at a time characterized by various forms of ‘emancipation’ from Paris. For example, the subversion of traditional sartorial codes and of the rules of classic couture, the revisiting of male and female identity, the experimenting with materials and the exploration of new forms of design, distribution and consumption.

The itinerary of the exhibition winds its way through the five rooms of the Rimini City Museum, each room focused on the themes in which Italian and Japanese designers were innovative precursors of the manners and trends. The last room is dedicated to the designer Romeo Gigli in whose work oriental and western style and aesthetic were combined. All the items of clothing in the exhibition belong to the Archivio di Ricerca Mazzini in Massa Lombarda..

展覧会「80・90年代における美との対面—イタリアファッションと日本ファッションを通して」は、2013年10月11日から12月8日まで、イタリアのリミニ市立博物館におい

て開催された。本展覧会はイタリアと日本のファッション・デザイナーによる 1980 年代・90 年代の作品をリチェルカ・マツィーニ・アーカイブの所蔵品を通して紹介したものである。展示は「機能の解体」(展示室 1)、「ドレスダウン/ドレッシング・ザ・パート」(展示室 2)、「黒とグラフィック」(展示室 3)、「静かなる革命」(展示室 4)、「ロメオ・ジリ」(展示室 5) といった 5 つのセクションから構成されている。素材や色彩の使い方、斬新なフォルムなどによって、20 世紀末のイタリアと日本のファッションがそれまでのフランスを中心としたファッションの世界に新たな美学やスタイルを提示した様子をテーマごとに目にすることができる。

以下は、同展のキュレーターである、シモーナ・セグレ・ライナッハ (ボローニャ大学教授) がファッションをキュレーションすることへの思いや、展覧会の概要および見所について述べた内容をまとめたものである。

ファッションをキュレーションすることは、ファッション研究における中心的な関心事になってきている。これについては複数の論文が既に執筆されており、こういったキュレーションの実践が必然的に伴う進展や両面性、議論を例証している。たとえば、ダイアナ・ヴリーランドをめぐる議論 [Steele 2008]、「新しいファッション史」における展覧会の役割 [M. Riegels 2011, C. Breward 2008]、ファッションで西洋と東洋を表象する際の理論的 (そして視覚的) な両面性 [Fukai 2010a] などがある。

近頃では、キュレーションは、ファッション理論においてとりわけ熱い話題であるように思われる。博物館や美術館でのファッションの人気は、芸術を構成するものについての新しくより幅広い受容と、ファッション研究への高い関心と密接な関連を持つ [Fukai 2010b, Riegels 2011]。そして衣装からファッションへの博物館学の移行は、キュレーションの実践ならびに方法論における変化を伴っている [M. Riegels 2011]。というのも、ファッション展がますます博物館や美術館で人々を惹きつけているのに加え、研究者や学生にとって、ファッションがどのようなものかを検証する場にもなっているからである。ファッションを見せる方法はさまざまあり、それらの方法には隔たりというより連続性が存在していると言える。小売りやファッション・ショー、ファッション系のブログはすべてキュレーションに関わりを持っている。つまり [キュレーションとは]、生地や衣服を具体的なファッションの提示法に変容させるための方法を選択することなのである。

他方で、プロのファッション・キュレーターとしての経験は、「真の」展覧会とはどのようなものであるか、またコミュニケーションの装置 [展示の方法] をいかにするかを決定するうえで極めて重要である。この意味で、ラガーフェルドの手がけるシャネルブランド

のコミュニケーション〔提示方法〕は、芸術とマーケティングを分けることの難しさを示す好例である。しかしながら、結局のところ、キュレーティングが単なる表象の分野から理論的な密度を持ったものへ移行すると、ファッション展は革新的な学問の場になりうるのである。

実際、いわばファッション・キュレーティングの新しいものは、専門学校や大学のファッション課程から生まれている。これらの展覧会は綿密な研究の成果であり、娯楽性と教育性を目的としている。よって、ファッション史およびファッションイメージの多様な側面について考えるための何よりのツールになる。このことは、ファッションに特化した博物館が未だ存在せず、展覧会がその代わりとなって機能しているイタリアにおいてはとりわけ興味深いことである。

下記では、2013年10月から開催された展覧会について紹介していく。展覧会は、ポローニャ大学リミニ・キャンパスのファッション課程の学生と共に、筆者がキュレーションを行ったものである。

## 展覧会の概要

展覧会「80・90年代における美との対面—イタリアファッションと日本ファッションを通して」は、1980年代と90年代にピークを迎えた二つの重要なファッションシステムの美的、文化的、コミュニケーション的革新を探求するものである。そのうちの一つは、アルマーニ、ヴェルサーチ、フェレ、モスキーノ、コベリといったイタリア人デザイナーによるプレタポルテ。もう一つは、三宅、川久保、山本などに代表される日本人デザイナーのラディカルなファッション。(後者は有名な1981年のパリでのファッション・ショーに端を発する。)1980年代から90年代にファッションは大きな事象となり、重要な製品として、文化産業として、主要なコミュニケーション手段の一つとして確立された。日本とイタリアのファッションは、より伝統的なフランスファッションの支配に並んで、現代ファッションの二大潮流となったのである。その歴史と伝統の相違にもかかわらず、この二つのファッションの傾向は、パリからの「解放」としてさまざまな形で特徴づけられた、ある基本的な側面を共有している。つまり、伝統的で古典的な仕立ての規則の転覆、男女のアイデンティティの修正、実験的な素材の使用、デザインや流通、消費の新形式の模索などである。この時代、イタリアとに日本のデザイナーはファッション全体に革命を起こした。それぞれが自身のスタイルと伝統に則って、時に〔伝統を〕再発見するも、しばしば「裏切った」。そして時折よく似た方法で、多くは全く異なる方法で、たまに補足し合う方法で、それらを根底から覆したのである。

展覧会のオープニングではシンポジウムが開かれた。シンポジウムの出席者は、深井晃子（京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）、ロメオ・ジリ（ファッション・デザイナー）、アントニオ・マンチネッリ（ジャーナリスト、ファッションライター）、アッティリオ・マッツイーニ（マッツイーニ・アーカイブ）、ラーラ・アラニーヨ（ファッション史家）である。

また展覧会の順路は、リミニ市立博物館の新翼にある実験的スペースの5つの展示室を進むものとなっている。各展示室はテーマごとに分かれ、イタリアと日本のデザイナーが革新的な先駆者となった様式や傾向に焦点をあてた。それらは、今日ではファッションの国際的な文化遺産と言えるものである。展示室の最後は、東洋と西洋のスタイルや美学を融合させた作風のデザイナーであるロメオ・ジリに捧げられている。

#### マッサ・ロンバルダのリチェルカ・マッツイーニ・アーカイブ

展覧会で使用された服飾、すなわち装飾品 130 点と衣装 70 点はすべて、マッサ・ロンバルダ（イーモラ）にあるリチェルカ・マッツイーニ・アーカイブが所蔵するものである。1970 年代後半にアッティリオ・マッツイーニは服飾の収集を開始。80 年代から 90 年代にかけて国内外のさまざまな出所からの服飾が加わったことで、彼のコレクションは非常に豊かになった。今日、マッツイーニ・アーカイブは 25 万点以上の衣装および装飾品を誇り、それらの所蔵品は参照され、利用されている。世界中から数多くのファッション・デザイナーや事業者、ファッションスクールの関係者、専門家が同アーカイブを訪問している。実際には、「発展中のミュージアム」であるマッツイーニ・アーカイブの所蔵品が教育を目的とした展覧会で展示されるのは今回が初めてのことである。展覧会では、ボローニャ大学リミニ・キャンパスのモード文化・技術コース（学士課程）およびモード専攻（修士課程）の学生の協力を得た。

#### 展示室 1

##### 機能の解体：新たな形と布地

ジョルジオ・アルマーニとイッセイ・ミヤケによるファッション

素材や繊維の実験的な使用、そして珍しい布地の組み合わせは、衣服の形態と装いの人類学に大きな影響を与えた。ジョルジオ・アルマーニと三宅一生はそれぞれが異なる方法で、服作りの伝統を解体したのである。

ジョルジオ・アルマーニは男性ファッションの伝統的な布地を用いて、女性用スーツを

刷新し、ジャケットの解体によって男性用スーツに女性的な要素を盛り込んだ。粗野と洗練、構築とルーズ、エレガントとスポーティー、男性と女性といった対照的なコンセプトを組み合わせて、アルマーニは無比の優雅さと魅惑的な美しさを布地に吹き込んだのである。

「パリのファッション・デザイナーがシルクの繭に包まれている時、日本のデザイナーはポリエステルを抱擁した」とアメリカのジャーナリスト、スージー・メンケスは記した。天然と人工の〔素材の〕出会いによって始まった、三宅一生を特徴づける革新を彼女はこのような強調している。一枚の布から作られる現代的かつ機能的な三宅の衣服は、「プリーズ・プリーツ」のプロジェクトのように、身体と素材の相互の影響、さらには身体と衣服の間に形成される空間（日本語では間）に対して、彼が一貫して関心を持ち続けていたことを十分に物語っている。

## 展示室 2

ドレスダウン／ドレッシング・ザ・パート

隠す／見せる

バイラ、コム・デ・ギャルソン、エンリコ・コベリ、ドルチェ&ガッバーナ、ジャンフランコ・フェレ、ジェニー、クリツィア、イッセイ・ミヤケ、モスキーノ、ブラダ、ヴァレンチノ、ジャンニ・ヴェルサーチによるファッション

清貧の美学（日本）vs 魅惑的な美（イタリア）

日本人の静かなる画一性、エリート主義、密閉性は、イタリアのプレタポルテの多くが特徴とする身体への強烈な誇示と対比をなす。日本人デザイナーは控えめさを好み、非対称な裁断と視覚的な不均衡が伴う、知的なファッションを生み出す。そしてそのファッションは、ある特定のシチュエーションを想定した装いではない。

対照的に、新たなイタリアのプレタポルテが主に内包していたものとは、特定な場での衣服であった。昼と夜、仕事と余暇、クルーズや旅行、田舎、海や山のための装いで、それらは常に魅惑的な美しさと誘惑のもとにあった。

## 展示室 3

黒とグラフィック：新たな色彩と装飾の規則

コム デ ギャルソン、ジャンフランコ・フェレ、クリツィア、イッセイ・ミヤケ、モスキーノ、ジャンニ・ヴェルサーチ、ヨウジ・ヤマモトによるファッション

「黒は控えめであると同時に尊大な色である。黒は楽で、簡単な色であるが、神秘的でもある。だが、とりわけ黒はこう語る。煩わせないから、煩わせるようなこともしないでくれ。」(山本耀司)

「色彩は幸福へと通じる。色が陽気さを意味することをエンリコ・コベリが教えてくれ、これこそが彼を成功に導いた。なぜなら、コベリはグレーを使用するときでさえ、それは見事に色というものを伝えようとしたからである。」(フランチェスコ・マルティーニ・コベリ)

黒という色は、山本と川久保の初期のコレクションを完全に支配している。パトリシア・ミアーズは、こう記している、黒は、西洋では尊厳や悲哀を意味するが、日本人にとっては秘密や内密、巧妙さを象徴する色である。

日本人デザイナーたちによる黒の再発明、つまり西洋の服作りの伝統からも、東洋の服作りの伝統からも、まったく異なっている〔黒色の〕使い方は、日本人によるファッション革命の根幹をなすものの一つである。1980年代から現在にいたるまで、カラー〔有彩色〕／ノンカラー〔無彩色〕の新たな使い方をした結果、ほぼ見かけることのなかった黒は確実に日常着で使用されるようになった。

イタリアのデザイナーにとって、色彩や記号、コントラスト、奇抜な色と形の組み合わせは、表層に留まらない装飾の形式である。それらは、身体の勝利やトータル・ルック、回帰とアイロニーから生じる熱っぽく、幻想的かつ挑発的な雰囲気をも十分に表している。

ミラノをプレタポルテの首都とする、イタリアのスタイルは新たなファッション文化を代表しており、その色彩、装飾、プリントには、民主的な革命の軽やかさが認められる。ますます国際化するプレタポルテにおいて、〔プレタポルテは〕「イタリア製」が認知されるようになってきている。

#### 展示室 4

##### 静かなる革命：アメリカン・ジゴロと中性的なダンディー

ジョルジオ・アルマーニ、コム デ ギャルソン、ジャンフランコ・フェレ、マツダ、ミッソーニ、プラダ、ストーン・アイランド、ジャンニ・ヴェルサーチ、ヨウジヤマモトによるファッション

日本とイタリアのファッション・デザイナーは、男性美の再定義と深層的な変化にとも

に貢献してきた。それは、ドイツの心理学者ジョン・C・フリーゲルによって理論化され、19世紀ブルジョワ男性の「大いなる放棄」できっぱりと背後に追いやられた男性像を前面に押し出すことになった。

男性の女性化という新時代の幕開け。別の言い方をすれば、ファッションやボディケアのように、これまでほとんど女性のものでされてきた領域に男性が参入するようになったのである。

## 展示室 5

ロメオ・ジリ：西洋と東洋の出会い—交換と混成

ロメオ・ジリによるファッション

ヴェルサーチによる女性の開けっ広げな官能性と、アルマーニによる力強い女性の広い肩幅に対して、ロメオ・ジリは、日本的な女性美を喚起させる繊細でもろく、知的な女性性を提唱する。ファッションの歴史や西洋と東洋の衣装を熟知しているジリは、1980年代と90年代における日本とイタリアのファッションの仲介者と考えられるだろう。

## 衣服の分類

〔出展された〕衣服は、ある方法論に従って分類されている。その方法論とは、とりわけ展覧会のために考えられた、それぞれの衣服の文化的な来歴を記述することを目的としたものである。ブランド／デザイナー、アイテム、コレクション、年代といった一般的な情報の他に、リチェルカ・マッツィーニ・アーカイブが発見し、所蔵する以前の衣服の出所、さらには従来のメディアやあらたなメディアでの衣服の扱いについても情報が表示された。

「80・90年代における美との対面」展は、シモーナ・セグレ・ライナツハと彼女の学生たちによってキュレーションされた。展示スペースのデザインとグラフィックは、ジョイア・ルツとレアンドロ・バランギによるものである。

(翻訳：新實五穂)

## 〈参考文献〉

Anderson, F. (2000) "Museums as Fashion Media", *Fashion Cultures: Theories, Explorations and Analysis*, edited by Stella Bruzzi, pp.371-89, Routledge, London.

Beward, C. (2008) "Between the Museum and the Academy: Fashion Research and its Constituencies", *Fashion Theory*, 12, 1, pp.83-93.

- Fukai, A. (2010a) *Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion*, Merrell, London, New York.
- Fukai, A. (2010b) "Dress and Fashion Museum", *Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion*, 10, edited by Joanne B. Eicher, pp.280-94, Oxford, Berg.
- Riegels, M. (2011) "Fashion Museology: Identifying and Contesting Fashion in Museums", *Fashion. Exploring Critical Issues*, pp.22-25, Mansfield College, Oxford.
- Steele, V. (2008) "Museum Quality. The Rise of Fashion Exhibitions", *Fashion Theory*, 12, 1, pp.7-30.
- Steele, V. (2010) with Patricia Mears, Yuniya Kawamura, and Hiroshi Narumi, *Japan Fashion Now*, Yale University Press, New Haven.

シモーナ・セグレ・ライナツハ (Simona Segre Reinach)

文化人類学者。ボローニャ大学 (リミニ・キャンパス) のファッション学教授。グローバルな視点でファッションを論じた『Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion』や『The Fashion History Reader』(2010年)をはじめ、著書に『Mode in Italy』(1999年)、『La moda. Un'introduzione』(2005年・2010年)、『Orientalismi. La moda nel mercato globale』(2006年)、『Un Mondo di Mode』(2011年)がある。また『Fashion Theory』『Fashion Practice』『Business and Economic History』『Critical Studies in Fashion and Beauty』に論文を執筆。『Fashion Theory』『Dress Cultures』『The International Journal of Fashion Studies』の編集委員を務め、ファッション研究の今後の方向性について問題を提起している。イタリアのファッション研究機関 Associazione Italiana degli Studi di Moda (MISA)および Moda Immagine Consumi (MIC)の創設メンバーである。

(※肩書は掲載時のものです)